

小学校国語科における 説明的な文章を正確に理解する力の育成

－系統的な学習計画の作成を通して－

上富田町立市ノ瀬小学校
教諭 岩本 知磨

【要旨】 本研究は、既習事項を生かしながら、知識及び技能と思考力、判断力、表現力等が相互に関連し合う単元づくりを行い、児童に説明的な文章を正確に理解する力を育成することを目指した。その際に、教員用と児童用に既習事項をまとめた「系統図」を作成した。教員と児童が系統図を活用しながら、それぞれの指導事項が相互に関連し合う授業を繰り返し行うことで、「筆者の伝えたいこと」を正確に理解する児童の姿が見られるようになった。

【キーワード】 説明的な文章、既習事項、相互に関連し合う単元づくり、系統図

1 研究のねらい

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編（以下、学習指導要領と略記）では、「国語で正確に理解し適切に表現する際には、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことの『思考力、判断力、表現力等』のみならず、言葉の特徴や使い方、情報の扱い方、我が国の言語文化に関する『知識及び技能』が必要となる。」（※1）とあり、「『知識及び技能』と『思考力、判断力、表現力等』は、相互に関連し合いながら育成される必要がある。」（※2）ことや、「関連を図り、指導の効果を高めることが考えられる。」（※3）と示されている。また、「国語科の指導内容は、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、資質・能力の定着を図ることを基本としている。」（※4）と、学習の系統性も必要とされている。

所属校における、全国学力・学習状況調査等の国語科の調査結果では、「知識及び技能」の「情報の扱い方に関する事項」及び「思考力、判断力、表現力等」の「C読むこと」に課題が見られた。それらは、説明的な文章の問題であり、文章を読んで理解したことに基づいて適切な解答を選択するという設問であった。また、自身のこれまでの授業を省察すると、前の説明的な文章の単元とのつながりを意識して授業を行っていたものの、当該学年の前後の学年との系統性を踏まえて授業を行うことや、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」が相互に関連し合う単元づくりを具体的に把握することができていなかった。

これらのことから、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」「C読むこと」の指導事項が相互に関連し合う単元づくりを行い、系統性を生かした授業を行うことで、児童が目的に応じて必要な情報を読み取るための基礎的な知識及び技能を身に付け、説明的な文章を正確に理解する力が向上していくのではないかと考え、本研究テーマを設定した。

2 研究内容

本研究では、系統性に着目し、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」が相互に関連し合う単元づくりに重点をおく。

（1）系統図の作成

梅田（2019）は「子どもが学んだことを身につけ、自ら活用したり応用したりするようになるには、1つの教材だけでは足りない。学んだことを他の教材の学びに生かすことに

よって、力が定着し、活用力や応用力も付いていくと考えている。」(※5)と述べており、指導の系統を図ることで、文章中における筆者や作者の意図や主張を児童が読み取ることができるようになることも述べている。また、白石(2019)は、「『知識及び技能』の内容を教材に即して具体的に明示した系統を明確にすることによって、系統的な授業づくりを目指していくことができる」(※6)と述べている。これらのことから、系統的に学んだことを他の教材の学びに生かす機会を設定することが重要であると考えた。そこで、教員が既習事項を確認し児童が系統的に学んだことを生かす場面を設定できるように「教員用の系統図」を、授業において児童が学んだことを自ら活用したり応用したりできるように「児童用の系統図」を、それぞれ作成することにした。教員用の系統図は「項目別」と「学年別」の2種類を作成した。項目別の系統図は「構成」や「要約一要点」、「筆者の書き方の工夫」、「言語活動」等の系統ごとに整理しており、各項目をどの時期にどのように学んできたのか、またどのように生かしていくのかを確認し、学びを系統的に捉えることができる。学年別の系統図は、年間を通して児童に身に付けさせたい力が分かり、習得・応用させていく過程の見通しを立てることができる。また、児童のつまづきが見られた際には、「項目別」と「学年別」の2つの系統図からつまづいている箇所を確認し、対応することができる。一方、授業においては、児童用の系統図を活用することで、児童が「構成」や「筆者の書き方の工夫」等の既習事項を確認し、読む視点をもちながら系統的に学んでいることを意識することができる。

さらに、学習の振り返りについて森脇(2021)は、「ふりかえりには学習の定着(学び直し)、学習のメタ認知とともに、次の学習への課題意識の生成という機能があり」(※7)と述べており、堀(2011)は「学習における重要な点は繰り返し問い確認すること、学習した本質的な内容は自分で表現させたりすることによって身につくと考えられる」(※8)と述べている。そこで単元終了時には、その単元で学んだことを教員と児童で振り返り、児童が系統図に学習内容を書き足していく。このように、系統図を活用することで、継続的に学習に用いる言葉等を意識でき、特に説明的な文章においては、文章のどこに着目するのかという視点をもって読むことができるようになる考えた。

(2) 「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」が相互に関連し合う単元づくり

学習指導要領には、話や文章に含まれている情報を取り出して整理したり、その関係を捉えたりすることが、話や文章を正確に理解することにつながると述べられている。また鈴木(2018)は、「『情報の扱い方に関する事項』と『読むこと』の指導事項を相互に関連させた授業づくりを行う。このことが、『読むこと』の課題を克服し、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成することにつながる」(※9)と言及している。これらのことから、話や文章を正確に理解するには、情報と情報の関係を捉えたり、情報を整理し理解したりする力が重要であると分かる。そこで、「情報の扱い方に関する事項」と「C読むこと」が相互に関連し合う単元づくりを行う。まず、学習指導要領の「情報の扱い方に関する事項」と「C読むこと」の共通する内容をもつ指導事項を確認する。次に、共通する指導事項のうち、「C読むこと」に係る学習活動を設定する。その中で「知識及び技能」においてすでに身に付けている力を用いることが、課題解決につながることを児童と共有し、既習事項の復習を行う。これらを踏まえて、理解を深めた「知識及び技能」を用いて「C読むこと」に係る学習活動に取り組む。このサイクルが繰り返されるような、反復的に学習する単元づくりを行うことで、児童の説明的な文章を正確に理解する力を育成することができる考えた。

3 所属校における授業研究について

所属校の第4学年を対象に光村図書「未来につなぐ工芸品」における、単元前半の「C読むこと」領域の授業を計8時間実施した。また、研究の成果と課題を明らかにするために、アンケート調査を単元開始前、単元終了後の2回実施するとともに、児童のノートや振り返りシート等の記述内容を毎時間確認し、児童の変容について比較・分析を行った。

(1) 系統図を活用した学習について

教員用の項目別や学年別の系統図から、既習事項と本単元以降の学習内容や児童に身に付けさせたい力を確認し、単元計画を立てた。本単元を通して、児童が今まで学んできたことを生かしながら「筆者の伝えたいこと」を読み取り、要約することを意識できるように、児童用の系統図を活用する授業に取り組んだ。単元の学習をはじめると同時に、児童用の系統図は、説明的な文章の既習事項をまとめたものであり、授業中に必要に応じて活用できること、単元の終末に学習内容を自分たちで書き足すことを児童と確認した。

説明文の授業は単元が終わると次の説明文を学習するまで間が開くことが多く、系統的に学習することを意識しづらいのではないかと考え、単元の導入場面では、既習事項について児童用の系統図を使って振り返る時間を設定した。そして、単元目標である要約をするために必要な学習内容を児童用の系統図で確認し、「文章のまとまりの中心となる文」や「全体のまとめ」等を見付けると要約が書けることに気付かせることができた。その後、どのような学習の流れで文章を「初めー中ー終わり」のまとまりに分けたり、「中心となる語や文」を見付けたりすればよいかを、児童と話し合いながら授業計画を立てた。

単元の展開部分では、「筆者の考え」を捉えるために「初めー中ー終わり」に分ける場面において、それぞれ主に何が書かれているのかを考える場面で児童用の系統図を活用した。「終わり」の段落の分け方について意見の相違が見られたが、その際にも再度、系統図を活用しながら児童たちで話し合い、解決することができた。

単元の終末場面では、「中心となる語や文」をまとまりの中から探すことが要約につながることや、要約とは何か、要約するときの注意点等を児童用の系統図で確認し、要約を行った。その後、本単元で学習した要約について気付いたことを話し合い、児童用の系統図に書き足し、それも生かしながら前学年で学んだ文章の要約に取り組んだ。また、単元を通して上記以外の時にも、児童が自ら系統図を活用している姿が見られた。

(2) 「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」が相互に関連し合う単元づくりについて

筆者は、共通する内容をもつ指導事項を確認し(表1)、主に第5時から第8時に「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」が相互に関連し合う学習サイクルを意識した単元づくり(図3)を行った(表2)。第5時に既習事項である、目的を意識して「必要な語句」を判断することが本単元の「思考力、判断力、表現力等」の要約につながることを児童と共有した。そして、第6時に前時で整理した「中心となる語や文」の中から児童が要約する際に必要な表現を選び、「思考力、判断力、表現力等」の要約に取り組んだ。第7時には手本となる児童の要約文を元に児童と話し合い、目的を意識して必要な語句を判断するという「知識及び技能」につなげた。第8時に、前時までの学習で各自が身に付けた「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の力を、前学年で学んだ文章でも活用する学習場面を設定した。また、毎時間の学習の振り返りについて、堀(2011)は、一枚ポートフォリオは学習履歴を明確にし、振り返ることが可能となることや、自己評価ができることを述べている。

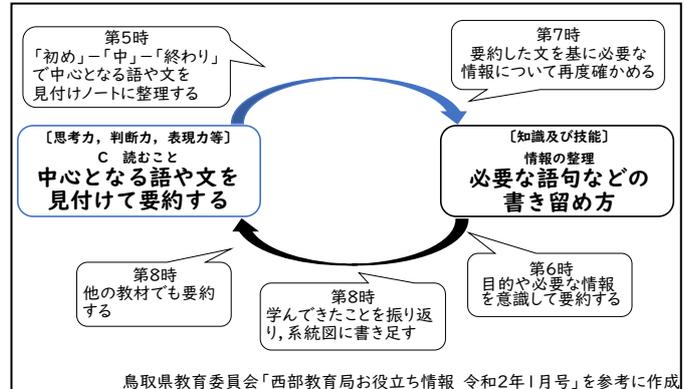


図3 相互に関連し合う学習サイクル(具体例)

八	七	六	五	四	三	二	めあて
							振り返り

図4 振り返りシート 堀(2011)を参考に筆者作成

そこで、振り返りは学びの過程を児童自身で振り返ることができるように、一枚のワークシートに一時間ずつ書くようにした（図4）。

表1 関連する内容が見られる指導事項（下線は筆者）

「知識及び技能」情報の整理 イ 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。	「思考力、判断力、表現力等C読むこと」精査・解釈 ウ 目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約すること。
---	--

表2 単元計画（一部抜粋）

【単元目標】 中心となる語や文を見つけて要約し、調べたことを書こう			
【教材名】 未来につながる工芸品（国語4 下「光村図書」）			
【単元の評価規準】			
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	・必要な語句などの書き留め方、辞書や事典の使い方を理解し、使うことができる（2）イ	・目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約することができる（思C（1）ウ）	・粘り強く、目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約しようとしている
【指導計画】			
時	主な学習活動（■本時のねらい）	評価規準	系統性・関連
1	■提案授業について理解する ・本単元につながる、既習の学習を学び直す（構成・段落など） ・自分たちの系統図を作ることを知る	【態】	〈系統〉 ・初め—中—終わり 3年「こまを楽しむ」 「すがたをかえる大豆」 4年 本単元 ・要点 4年「聞き取りメモの工夫」 要約 4年「要約するとき」 4年 本単元 4年「風船でうちゅうへ」 要旨 5年「言葉の意味が分かること」 5年「固有種が教えてくれること」 ・言語活動 1年「じどう車くらべ」 2年「おもちゃの作り方をせつめいしよう」 3年「すがたをかえる大豆」 4年 本単元 5年「固有種が教えてくれること」
2	■学習の見通しをもつ ・伝統工芸について知る ・題名から内容をイメージする ・要約するというゴールを知り、学習計画を立てる		
3	■文章の構成と内容を捉える ・段落分けをして、本文を「初め」「中」「終わり」に分ける ・「筆者」がこの文章で伝えようとしていることは何か考え、ノートにまとめる	【知・技】	〈系統〉 ・初め—中—終わり
4	・「中」の事例が何を説明するためにどのような例を挙げられているかを読み取り、例の役割を考える		—
5	・初め—中—終わりごとに中心となる語や文をノートに整理する	【知・技】	（関連） 【思・判・表】目的を意識して、中心となる語や文を見付ける 【知・技】必要な語句などを書き留める
6	■要約する ・中心となる語や文を生かして、前時に整理したノートを基に、「未来につながる工芸品」を200字以内に要約する ・手本となる児童の要約の何が良かったのかを話し合い、自分の要約と比べる	【思・判・表】	（関連） 【知・技】必要な語句などを書き留める 【思・判・表】目的を意識して、中心となる語や文を見付け、要約する
7	・学んだことを振り返り、系統図に書き足す ・「筆者」の考えについて思ったことや考えたことを書き、伝え合う	【態】	〈系統〉 単元で学んだことを系統図に書き加える （関連） 【思・判・表】目的を意識して、中心となる語や文を見付ける 【知・技】必要な語句などを書き留める
8	■振り返り ・「未来につながる工芸品」と構成が似ている文章を読み、要約する ・学習したことを話し合いながらまとめ、系統図に書き足す	【思・判・表】	〈系統〉 単元で学んだことを系統図に書き加える （関連） 【知・技】必要な語句などを書き留める 【思・判・表】目的を意識して、中心となる語や文を見付け、要約する

4 成果と課題

本研究のテーマである「説明的な文章を正確に理解する力」を育成できたかについて、分析を行った。単元に入る前に、教員用の系統図を活用することで、児童に身に付けさせたい力や、既習事項が本単元とどのように関わっているのかを確認し、本単元以降の学習内容について把握するなど、系統性を生かした単元計画を立て、実施することができた。授業では、児童が児童用の系統図を活用し、既習事項を生かして「筆者の考え」を捉え、要約につながるよう取り組んだ。それにより、授業の事前事後に行ったアンケートの「それまでに学んできたことを生かしながら取り組んでいますか」という問いでは、肯定的に回答した児童が11名増加した(図5)。さらに「系統図は説明文を読むヒントになりましたか」という質問に、肯定的に回答した児童は13名おり、「分からない言葉が出てきた時」や「迷った時」、「要約する時」に使ったと記述していた。そして、肯定的に答えた児童が、振り返りシートに系統図を活用し、要約することができるようになったと記述していたことから(図6)、多くの児童が系統図を活用して「筆者の考え」を捉えることができたと考える。また、第8時の前学年で既習の文章を要約する時には、授業で児童用の系統図を活用し確認してきた「構成」や「筆者の書き方の工夫」等の部分をメモしながら、読む視点をもって取り組み、「筆者の考え」を捉えている児童も見られた(図7)。さらに、教員用の系統図を活用し、本単元以降の学習内容を共有する授業を教員が行ったことで、振り返りシートに「このことを生かして5,6年で要旨を学習するのが楽しみです」と学習を系統的・継続的に考えられた児童もいた。

これらのことや、第8時に要約した文章で、教員が設定した評価規準を達成した児童のほとんどが系統図をヒントにしていたと答えていたことから、成果として、系統図を活用することで既習事項を生かして「筆者の考え」や「伝えたいこと」を見付けやすくなり、文章を正確に理解する力が育成されたと考える。加えて、当該単元以降で学ぶ内容も意識するなど、先を見通して学習に取り組むこともできた。しかし、系統図を授業中に見てはいるものの「難しい」と感じたり、活用方法が分からず活用しなかったりした児童が3名見られ、系統図の作成の工夫が課題と考える。

また、第8時に要約した文章で、教員が設定した評価規準を達成した児童はおよそ80%だった。事後アンケートで要約ができたと回答した児童は、その理由を「要約する前の準備がしっかりできたから」、「2~5時間目で学んだことを使って要約ができたから」と記述していた。さらに、第8時の振り返りシートには、初めは要約することが難しかったものの、繰り返し行うことで要約ができるようになったと自身の成長に気づき、まとめている児童がいた(図8)。これは、振り返りシートで第1時からの学びの過程を確認できた

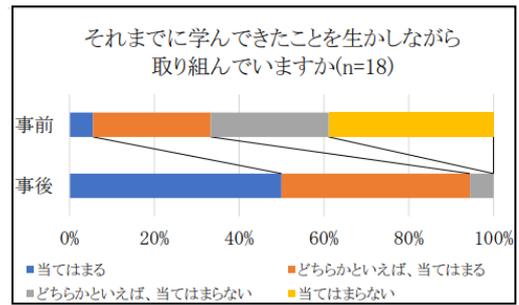


図5 アンケート調査結果の一部

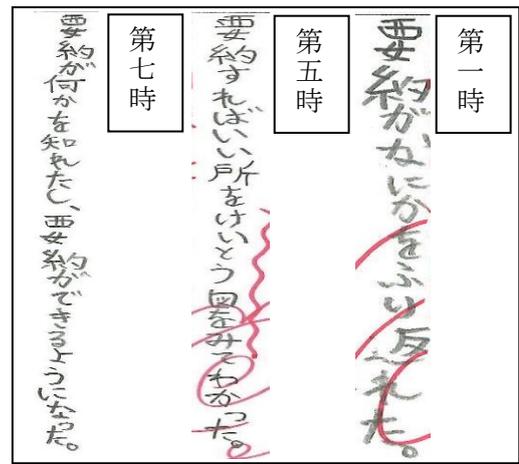


図6 振り返りシートに書かれた児童の変容

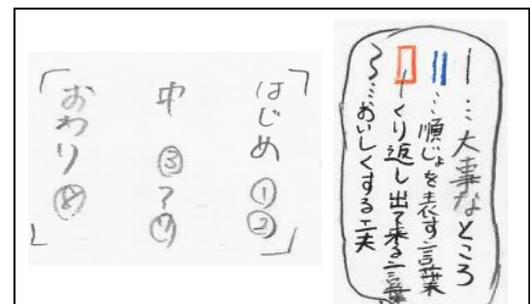


図7 前学年で学んだ文章に書かれた児童のメモ

ことによると考える。

これらの成果は、相互に関連し合う学習の単元計画を立て、指導事項が身に付くような学習活動を繰り返し実施したからであり、特に、系統図を用いて既習事項が要約につながることを児童が意識すること、要約した文章を振り返りそれを生かしてもう一度要約を行うこと等が効果的であったと考える。

しかし、系統図の説明や系統図の中から目的の言葉を探すなど、児童が系統図を使うことに慣れるまで、普通の授業よりも時間がかかることを考慮しながら単元計画を行うことが難しかった。そして、提案授業では第8時にもう一度要約を行ったが、このように学んだことを他の教材で生かす時間を日常的に設定するための時数の確保や素材選びが課題と考える。

今後に向けて、児童用の系統図を活用している児童もいたが、活用できず目標を達成できなかった児童も見られたことから、さらに活用しやすい児童用の系統図の工夫が必要だと考える。そのために、始めは児童の意見を取り入れ形式や文言を話し合いながら一緒に作成し、その後は自身に合った方法でそれぞれ書き足すことができるようにすることや、児童同士で活用の仕方を学び合うために、個人での活用にとどまらずペアやグループでも活用する場面を増やすなどする。その際に、授業支援システム等を用いて系統図を作成することで児童同士が共有したり、児童が児童用の系統図を随時活用・追記し、継続的に取り組むことができるように教育クラウドを活用したりすることも検討している。また、系統図を単学年だけで活用するのではなく、1年生から継続的に学校全体で取り組んだり、さらに国語の文学的な文章等、他の単元や、他教科でも系統図を作成し活用したりすることで、児童も教員も常に学習の系統性を意識し、積み上げていくことができるようになるのではないかと考える。

これらに加えて、単元で学んだことを他の教材で生かし定着を図る時間の設定については、児童に身に付けさせたい力を明確にし、その定着を図ることができるよう年間指導計画の見直しを適宜行っていく。

第6時:要約が難しかった。

第7時:筆者の考えや伝えたいことが終わりに書いていることが分かった。

第8時:2時間目は工芸品にきょうみを持ってようになって、3時間目は分ける場所が分かって、4、5時間目から難しいことがでてきて、7時間目に筆者の考えを見つけられるようになって、この時間にやっと要約の文章をかけるようになって筆者の考えがどこにあるか、初めよりはやく見つけられるようになった。

図8 児童の振り返り

<引用文献>

- ※1 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』東洋館出版社 p.7（2018）
- ※2 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』東洋館出版社 p.8（2018）
- ※3 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』東洋館出版社 p.86（2018）
- ※4 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』東洋館出版社 p.10（2018）
- ※5 白石範孝,「考える国語」研究会『深い学びが育つ「考える国語」の系統的授業のつくり方』学事出版株式会社 p.5（2019）
- ※6 白石範孝,「考える国語」研究会『深い学びが育つ「考える国語」の系統的授業のつくり方』学事出版株式会社 p.9（2019）
- ※7 森脇健夫「授業におけるふりかえりの実践的研究」三重大学教育学部『三重大学教育学部研究紀要 第72巻』 p.383（2021）
- ※8 堀哲夫「OPPAの基本的骨子と理論的背景の関係に関する研究」山梨大学教育人間科学部『山梨大学教育人間科学部紀要 第13巻』 p.96（2011）
- ※9 鈴木愛子「研究論文 国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する小学校国語科の授業づくりー『情報の扱い方に関する事項』と『読むこと』を相互に関連させてー」滋賀県総合教育センター国語科プロジェクト研究 p.1（2018）

<参考文献>

- ・白石範孝,「考える国語」研究会『深い学びが育つ「考える国語」の系統的授業のつくり方』学事出版

- ・中央教育審議会教育課程部会「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」(2016)
- ・鳥取県教育委員会「指導事項を明確にした小学校国語科の授業づくり」『西部教育局お役立ち情報 令和2年1月号』(2020)
- ・堀哲夫「OPPAの基本的骨子と理論的背景の関係に関する研究」山梨大学教育人間科学部『山梨大学教育人間科学部紀要 第13巻』 pp.94～107 (2011)
- ・光村図書 国語1年～6年 (2023)
- ・文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』東洋館出版社 (2018)